



翁長知事の遺志を継いでいこう

◆負けられない闘い

◆無残に囲われた海

8月10日、フォーラム平和・人権・環境のメンバーとともに平和丸に乗船し、辺野古・大浦湾の埋立予定区域を視察した。美しい海の一部が、護岸工事で無残にコンクリートで囲われてしまった様を間近で見た。

船長は「海が囲われたため海水温が上がリ、潮の流れは変わってしまった。シユゴンの食糧である海草(うみくさ)も減り、故郷に帰って産卵するウミガメはここに戻れなくなってしまう。平和と環境、いのちは切り離せないものだ」と語り、平和や人権、環境に取り組むNGOや市民がともに力を合わせることの重要性を指摘した。

海には海上保安庁と民間警備会社の船が何隻も私たちを監視し、何の法的根拠もなく拡大された「臨時制限区域」から出て行くと警告し続ける。何人もがカメラをこちらに向け撮影していたが、海上で警備にあたっていた男性が市民らの写真を「なぜ逮捕しない」などとツイッターに投稿していたことが最近わかり、問題になっている。

大手メディアは、護岸工事で一部区域が封鎖された画像を流し、工事がかなり進んでいる印象を与えているが、実際には一部の護岸工事が終わつたに過ぎない。しかも、マヨネーズ状の軟弱地盤や活断層の存在が明らかになり、ここに基地を造ることが可能なのかも怪しいのだ。

それは、7月27日、翁長知事が最後の力を振り絞り、前知事による埋め立て承認「撤回」を表明した大きな根拠にもなった。

◆待たれる「撤回」

翁長知事が亡くなり、当初8月17日に予定されていた土砂投入について、国は先延ばしすることを真に伝えた。「喪に服す」などとしているが、知事選対策などは明らかだ。翁長知事から生前、「もしもの時は君に頼む」と「撤回」を託されていた謝花副知事は、8月27日現在、動いていない。

しかし、8月11日の県民大会では「辺野古に新基地は作らせない」という翁長知事の強く熱い思いを受け止め、引き続きしっかりと毅然として判断していくと7万人を前に明言している。その後、埋め立て承認「撤回」によって工事が中断した場合、国は1日当たり2000万円の賠償金を県に請求する見込みだと報じられても「覚悟を決めている」と表明した謝花副知事。その言葉を信じたい。



▲県民大会に参加を予定していた翁長知事の「辺野古ブルー」の帽子を見つめる謝花副知事

翁長知事の次男で、那覇市議の翁長雄治さんは県民大会で「父は「沖縄は試練の連続だ。しかし、一度もウチナンチュとしての誇りを捨てることなく闘い続けてきた。ウチナンチュが心を一つにして闘う時には、おまえが想像するよりもはるかに大きな力になる」と何度も何度も言っていた」と言い、さらに「日本全国、多くの国民が必要だという日米安保、米軍基地。国土の0.6%にすぎない沖縄に70%以上もあるのは過重すぎないか。沖縄の問題ではなく日本国の問題、課題だと認識し議論してもらいたい」と訴えた。

いよいよ県知事選が9月30日に迫った。自公側が早々に候補者を立てて事実上選挙戦をスタートさせる中、翁長知事の後継はなかなか確定しなかった。しかし玉城デニー衆議院議員が出馬の意向を示し、官野湾市長選の候補も決まった。

沖縄県知事は、他の自治体首長とは異なる。翁長知事がそうであったように、本来、内閣総理大臣や外務大臣、防衛大臣が担うべき役割まで求められる激務だ。米兵の父とウチナンチュの母の間に生まれた玉城議員は「私には米国の血が2分の1流れている。だから私の言うことは半分は聞いていただく。残りの半分は日本政府に聞かせる」と話す。

翁長知事が希求した「平和で誇りある豊かな沖縄」の実現は、真に独立した日本を実現することにほかならない。来る知事選勝利は、その第一歩だ。



▲おびただしい数の沖縄防衛局、海上保安庁、セントラル警備保障の船。私たちが乗った船の名前を繰り返し名指しして「警告」し続けた